

◆ 第 6 部会 視察研 研修会 ◆

令和 4 年 10 月 18 日(火)部会員 10 名が参加し、陸前高田方面を巡る視察研修会を実施した。

はじめに米沢ビルを視察した。米沢ビルとは、東日本大震災発生時にこのビルの屋上にある煙突部分に避難して津波から逃れることができたビル所有者の米沢祐一氏が、その経験を語り継ぐ活動を続けながら、現在も自費で維持管理を行っている民間の震災遺構である。

震災以前、この一体は市役所や市民会館、警察署などがあり陸前高田市の中心地として賑わっていたというが、現在はかさ上げされた広大な土地が広がっており、そこに被災当時の姿をとどめたビルがぽつんと残されていた。



▶ビルに入る前に震災以前の街の様子について写真と現在を比較しながら説明を受ける様子。この一体は市の中心地として市民会館や警察署、住宅など多くの建物があつた。

参加者全員がヘルメットを着用し、建物内を見学しながらご本人の解説により米沢氏の過ごした 3 月 11 日を追体験した。

3 月 11 日当日、午前中には 1 ヶ月前に生まれたばかりの米沢氏の娘さんのお宮参りへ行き、午後からの出勤であった。自身が包装資材小売業を営む店舗があつた米沢ビルではなく、近くの倉庫の方で作業をしていたところ、大きな揺れに襲われた。立っていることもままならない揺れに膝に手をつけて耐えていると、倉庫内の頑丈で大きな棚が倒れるのを目の当たりにした。揺れは約 2 分半続いたが、体感としてはもっと長く感じたという。

揺れが収まると、店舗があつた米沢ビルへと急いだ。「あんなに頑丈な棚が倒れたのだ。お客様が、従業員が誰か怪我をしているかもしれない。」その思いで店へ向かうと、幸いにも怪我人はおらず、店先に散乱した商品を弟さんと従業員が片付けているところだった。程なくして自宅にいた米沢氏のご両親も駆けつけ、従業員を先に家に帰すと、家族 4 人で店の片付けを行った。避難するというよりも、とにかく片付けることで頭がいっぱいだった。この時はまだ、米沢さんの中に「津波が来る」という考えは浮かばなかったようだ。観測史上最大のチリ地震津波を経験しているご両親の口からでさえ、「津波」という言葉は出なかったという。

店の片付けをご両親と弟さんに任せ、米沢氏は先程の倉庫の片付けを行うため、あとで市民会館で会おうと約束し一人店を出た。ご両親の「気を付けろよ」という声と、裏口からひょっこりと顔を出した弟さんがこちらに手を振る姿。それが米沢氏にとってご家族の最後の記憶となった。

倉庫に移動し作業を行っている時、市の防災無線から発せられる津波警報が耳に入ってきた。緊張状態と、とにかく片付けなければという思いで必死になるあまり、米沢氏の耳にその警報は届いていなかったのだ。するといつから鳴り響いていたのかも分からないその防災無線の警報が、「気仙川の防波堤を津波が越えました。避難してください。」と告げ、突然ブツツと途切れた。米沢氏の胸にこれは異常事態かもしれないとザワザワとした感情が押し寄せ、避難を決めた。

昔から三陸沿岸では数々の津波被害に遭ってきた。その経験からこの地域の人々は防災意識も強く、「何かあつたら指定避難場所である市民会館へ避難する」と認識していたという。

しかし米沢氏はそれでも再びビルに戻った。もしかしたら誰か店に残っているかもしれないという思いがよぎつたのもあるが、実際のところ米沢氏自身もなぜあの時まっすぐに市民会館へ向かうことをせずにビルへ戻ったのか、今となつては不思議な感覚だそう。

ビルに着くと既に誰もおらず、家族は皆市民会館へ避難したのだとホッとした。自分もそちらへ向かう前に、少しだけ上の階の様子も見ておこうと2階へ上がり窓の外を見ると、真っ黒い波がすぐそこまで流れ込んできていた。コンクリートなのか、建物の一部なのか、とにかく得体の知れない何かの塊がゴロゴロと波に押されて転がる様子が見えた。慌てて3階へ上がり再び窓の外を見ると、ワンフロア分の階段を上るほんの数秒のうちに津波は恐ろしい勢いで押し寄せ、2階建ての隣家の屋根までも飲み込んでしまっていた。



▶屋上に上がり米沢氏の行動を追体験する一同。

迫りくる津波の恐怖を感じながら急いで屋上へと駆け上がり外に出たが、それでも黒い波は容赦なく追いかけてくる。屋上の更にある煙突部分へ繋がるはしごを必死で登った。1メートル四方の煙突部分によじ登ってしゃがみ込み、波が自分をさらってしまった時のために煙突の縁をぎゅっと掴んで踏ん張った。「死んでしまうかもしれない」そんなことが何度も頭をよぎる極限の恐怖の中、幸いにも波は煙突の数センチ下で留まった。

ふと周りを見渡してみると、視界に広がるのは真っ黒な波だけだった。この時米沢氏が避難した煙突は地上から約15メートルの高さである。見学した我々も同じ場所の上らせていただいたが、この見晴らしのいい場所から見えるすべての景色が黒い波に覆われ、そしてそれがこの足元まで迫り、いつ自分を飲み込んでしまうかもしれない…どんなに恐ろしく生きた心地のしなかったことか、もはや想像も及ばない程の恐怖であった。

煙突部分に打ち付ける波のしぶきが飛び、雪が頬に当たる。その体制のままのくらいの時間が経ったのか、しばらくして後ろを振り返ってみると、そこにあるはずの市民会館が見えない。ご両親や弟さんが逃げ込んだ市民会館は、無残にも真っ黒な波の底に沈んでしまっていたのだ。米沢氏はその光景を見て「両親と弟は死んじゃった…」そう思ったという。市の指定避難場所として多くの人が避難した市民会館では、130人以上が犠牲となった。ご両親と弟さんは津波に流され、市民会館から離れた場所で後日発見されたそうだ。

夜になり波が少し引けてくると煙突からは降りることができたが、今度は寒さが米沢氏を襲った。命を守ることに必死になるあまりそれまで気付かずにいたが、足が水で濡れてしまっていた。凍えるような寒さの中、刺すように吹き付ける海風が追い打ちをかけるように体温を奪っていく。体はぶるぶると震え、このままでは低体温症で死んでしまうと感じた。実際に東日本大震災では津波から逃れることができた人も、この寒さによって低体温症になり亡くなってしまった人が大勢いたそうだ。

仕事道具を腰に身に着けたままだった米沢氏は、小さなライトを持っていることに気付き、何か寒さをしのげるものは無いかと夜の闇の中を照らすと、未開封のゴミ袋を見つけた。その袋を拾い、カッターで頭と腕を通す穴を開けて被った。更に別の袋もズボンのように履き、少しでも体温が奪われることを防ぐために一番風の当たらない場所に身を縮めるように体育座りをして、恐怖と不安の中一睡もせず一夜を過ごした。

空が明るくなり始めて見えたのは、瓦礫に埋もれ変わり果てた街の姿だった。上空には、いつからか救助のヘリコプターが飛び交っていた。少し離れたところにあった県立病院の屋上から、人が救助される様子が見えた。

しかしその後 10 時になっても、11 時になってもヘリは米沢氏のもとにはやってこない。突然襲ってきた大災害に家族の行方も知れず、恐怖、不安、緊張、寒さ、疲労、身体的にも精神的にも疲弊しきっていたが、「黙っていても気付いてもらえない。このままではこの場所に取り残されてしまう。なんとしても今日のうちに救助してもらわなければ！」と自らを奮い立たせた。

屋上まであった波が引けたあとに残された泥を掻き、ヘリから見えるように「SOS 外に出れない」と書いた。その場にぴよんぴよんと飛び跳ねながら、どうか気付いてくれという一心で力一杯手を振り続けた。どのくらいそうしていたのか分からないが、腕を振りながらだんだんと意識が朦朧としてきたその時、ヘリが米沢氏の頭上にやってきた。スルスルと降りてきた救助隊員が声を掛ける。「お名前は？」「他に誰かいますか？」その問いになんとか短く答えながらも、米沢氏はほとんど呆然とした状態だったという。その様子に、救助隊員がガシッと米沢氏の肩を掴み、「米沢さん！大丈夫ですよ！助かりましたよ！」と大きな声を掛けられてハッとし、初めて自分は助かったのだということを実感したようだ。すると張り詰めていたものがすべて解き放たれたように一気に体の力が抜けた。3月12日の午後であった。



▶避難時の様子を再現する米沢氏。



▶米沢ビルの外観。

もし店に立ち寄らずにあのまま市民会館へ避難していたら。もし夜の闇を照らした小さなライトを持っていなければ。もしゴミ袋を発見できていなければ…。「たくさんの偶然が重なって今自分は生かされている。語り継いでいくことは生き残った者の使命だと思う。私の体験から、少しでも皆さんの中に防災の意識を持ってもらえれば。」と米沢氏は語る。

ご自身の家族を亡くされた経験を何度も語るというのは、苦しさを伴うに違いない。しかしそれでも米沢氏はあの3月11日の出来事を、思いを、力強く懸命に語りかける。米沢氏の防災への願いが込められた記憶のバトンを受け取った我々は、この体験を身の周りの人に伝え、活かし、繋いでいく責務があるのだと感じた。参加者は終始真剣な眼差しで米沢氏の言葉に耳を傾け、避難の一部始終を体感し、この貴重な機会から得たことをそれぞれに考え噛みしめている様子であった。

次にいわてTSUNAMIメモリアルへ向かった。館内は4つのゾーンに分けられ、岩手県が津波と共に歩んできた歴史や、東日本大震災発生時から現在に至るまでの様々な記録が、文章や絵、映像を通して克明に記されており、解説を聞きながら館内を見学した。上映されている映像の中にあつた「100回逃げて、100回津波がこなくても、101回目も必ず逃げて」という言葉が非常に印象深く響いた。

岩手県の三陸沿岸には「津波てんでんこ」という教えがある。「てんでんこ」とは「それぞれに、各自で」という意味の方言であり、「津波が来たら周りを気にせず、てんでんばらばらに逃げなさい」という教訓だそうだ。昔から幾多の津波に襲われ、その度に多くの命が犠牲になるという悲劇が繰り返されてきたこの地域で、人々が子供や孫が津波から逃げ遅れることがないようにと小さな頃から繰り返し言い聞かせ、「何がなん

でも逃げろ、必ず生き残れ」という強い思いが込められているようだ。災害はいつやってくるか分からない。今この文を読むあなたにも、「津波てんでんこ」という教えをどうか胸に刻んでいただきたい。一人でも多くの命が助かるように、悲しい思いをする人が一人でも少なくなるように。

最後にワタミオーガニックランドへと向かった。同施設は命や循環をテーマに、農業や環境、エネルギーについて様々な体験を通して学ぶことができる有機農業テーマパークとして2021年4月にオープンした施設であり、今後20年かけて更に整備が進められるようだ。

昼食後、解説を受けながら施設内を見学した。大きなポットで育てられているたくさんのブドウの木は植えられて今年で2年目。ブドウの木をポットで育てるのは挑戦的な試みで、順調に育てば3年目を迎える来年には初めての実を付けるとのこと。収穫量が安定してくれば、再来年以降にはそのブドウでワインを作る計画だそうだ。

また、このブドウの木の上にはソーラーパネルが取り付けられ、ソーラーシェアリングが行われている。ソーラーシェアリングとは、太陽光発電を行うと同時にパネルの下では農産物を育て、発電と営農の両面で太陽をシェアする取り組みのことである。

本施設に設置されているソーラーパネルにおいては、ブドウの実に雨が直接当たりカビが繁殖して腐りやすくなってしまふことを防ぐとともに、蔓を伸ばして成長していくブドウの木のために本来大量に必要な柱等の役割も果たす。更に作られた電力は施設内で使用され、まだできたばかりのこの施設だが、新しい循環の形が既に形成されはじめていた。



▶ソーラーシェアリングについて説明を受ける様子。
黒いポットの一つ一つにブドウが植えられている。



▶植樹を行う様子。



▶植樹を終え、参加者全員で記念撮影。

その後は畑なども見学し、最後に2人1組になって樹木の苗木の植樹体験をした。土や緑に触れることで自然と全員の表情もほころび、和やかな空気の中で無事にすべての苗木を植えることができた。

その苗木は今はまだ細くて頼りなく、この土地特有の強い海風が吹けば折れてしまいそうである。だがこの苗木が、かつて「壊滅した」とまで言われたこの街の大地に力強く根を張り、大きく育っていくことにはとても大きな意味があるはずだ。震災後、陸前高田市の復旧・復興を目指して進み続けてきた人々の様々な思いや努力が、長い年月を経て少しずつ結実しているのだと感じられ非常に感慨深かった。

新型コロナウイルスの影響により本視察研修はここ数年中止となっていたが、今年は3年ぶりの実施に至った。当日は素晴らしい秋晴れに恵まれ、同じ時間や体験を共有することで部会員間の交流を深めることができ、充実した1日となった。